

本報告では、「博物館」の語源に注目し、日本において「博物館」なる語にいかなる意味が付与され、変容してきたかを明らかにすることを目的とし、考察を行った。

日本において博物館が人々に紹介され、統一した意味を持つようになるには、長い時間を要している。18世紀半ばより、『波留麻和解』『道訳法児馬』といった蘭和辞書が、また19世紀初頭には『諸厄利亜語林大成』に代表される英和辞書、百科事典などが翻訳され、海外のさまざまな事柄が紹介されるようになった。しかし、1862年、堀達之助が編纂した『英和对訳袖珍辞書』のなかで「Museum」を「學術ノ為ニ設ケタル場所 学堂書庫等ヲ云フ」と翻訳されるまでの、約100年余りの間、MUSEUM EXPOSITION FAIR といった博物館や博覧会に相当する語の紹介は一切行われておらず、当時の人々が博物館への関心をほとんど持ちえなかったことがうかがえる。また1860年(万延元)遣米使節団が派遣され、Patent Office、Smithsonian Institutionを見学した際の団員の日記中に初めて「博物館」という語を用いて記録されているが、一方で「珍禽虫奇獸珍貝魚類其外百貨貯蔵ノ所」「寺院ノ様ナ所」「名器宝物収蔵ノ所」などと記録されており、必ずしも「博物館」という語が一般的に利用されていたわけではなく、また施設の意味についても多様なとらえ方がされていた。その後、福澤諭吉の『西洋事情』において「博物館」が紹介されるのをもって、博物館は多くの知識人の知るところとなったが、明治以降も博覧会と博物館の未分化な状態にあるなど、「博物館」という語が統一した見解を持つに至るには、長い時間を必要とし、また「博物館」という用語自身の成立、また意味をみても、大変な紆余曲折があったといえる。このような「博物館」という語の生成と変遷は、同時に日本における博物館の概念の形成とも密接な関係にあると理解される。

上記の問題意識に基づいて、特に江戸時代後期から明治初期にかけての「博物」「博物学」の用語が持つ意味の変化に注目して分析を行った。1872年に文部省博物局が博物館を創設するにあたり、作成した最初の基本構想は「博物学之所務」であり、その内容に「博物局・博物館・博物園・書籍館建設之案」が含まれている。この点から見ても明治初期に博物館と「博物」「博物学」には深い関わりがあったことが伺える。

具体的には、まず、「博物学」と「博物」が近世でどのように用いられ、理解されていたのかを、用事集・国語辞典の一種である節用集や、『博物筌』と呼ばれる書籍のなかでの使用例を取り上げ、続いて近代以降の博物学および博物館の設立に人材面においても、方法においても、大きな影響を与えた近世本草学の流れを概略し、最後に近世末から明治初期にかけての博物学、および博物館の訳語の登場とその内容、および海外使節団見聞録の記述をとりあげた。その結果、近世において「博物」という語の使用頻度は著しく低く、また使用例から、その意味するところは日々の生活にまつわる事柄から神事、芸能など多岐にわたり、目に見える事象から、占いなど目に見えない事象まですべてを包括していたとことが明らかとなった。また「博物館」と同様に、「博物学」は近世末期から明治20年代まで、博物学と物理学、格物学の混同がみられ、形而上的な物の理といった伝統的な哲学の意味で用いられることも少なくなく、統一した語の成立には多くの時間を要したことがうかがえる。なお、「博物館」の用語の成立に関しては、中国での訳書が与えた影響の大きさが指摘できよう。

このような状況の要因として、近世において「博物学」という語が用いられることがほとんど無かった点、また「博物」の指す内容が非常に広がった上に、日々の生活に関する内容から、占いに至るまで漠然とした不可視的な内容までも包括したものであったことから、新たな語彙の意味を確定する上での障害となったことが推測できる。

明治期になると、博覧会・博物館の多くは国家の威信をかけた政策の一つとして取り組まれたが、そこでの展示

品の多くは「奇品」「珍什」の域を超えることはなく、まさしく方向性を模索しながらの出発であった。その後、博物館は魅惑的な内容を公開した好奇心に基づいた展示と分類への志向を交差しながら、見聞を広める施設として、また知識の収蔵庫として、文明を切り開く手段として注目され、制度化されていくが、語彙的にも同様の問題をはらんでいたのではないだろうか。

本報告は、博物館、博物学、本草学、訳語といった事項を横断的に取り上げたため、個々の事例を詳細に検討できなかった。したがって今後の課題として、近世末期から明治初期の欧米見聞視察にみる博物館・博覧会の認識の詳細にわたる分析の必要性が指摘された。